

くみゆるものなれば、螺蟻の腰の細きに譬へて、野山に近き里人などの目馴たるまゝに、あだ名にすがると呼たるが、おのづから世にもあまねき一名となれるものなるべし、山里人云、鹿は肩を、腰のつがひを、よく打てば、ありくこともえせずなるものなり、舊説に、若き鹿なりともいへるは、かれが若きほどは、殊にひわづに瘦ばみたれば、其たとへまたくしきこゆ、もとはかれが若きをいへるを、なべてのうへにおよぼして呼ぶ事となれるにてもあるべし、略○中

又鹿をかせぎともいふよしは、牡鹿の角を織機具の持カセの如く見なしてたとへたるなるべし、但し今の世になべて用ふ持は、さばかりたとへつべくもあらぬを、其古ざまなるをおもひてかくはいへるなり、さるにあはせては、こゝにいはいはむもことごとくしくてつきなけれど、いにしへの持の事をもわきまへがてらいふべし、其はまづ古語拾遺に、御歳神の所爲を記せる文に、發怒以蝗放其田、苗葉忽枯、損似篠竹云々とありて、其を大地主神の占へ給へるに、御歳神の告給へる言に、宜以麻柄作持持之と見えたり、持は新撰字鏡に、持力棟反加世比とみえたるこれなり、略○下

鹿性質
鹿形體

〔本朝食鑑十一〕鹿今訓志加、或曰加乃之志、

集解鹿處處山林有之、馬體短尾、頭類馬而長、高脚而行、駛四蹄有岐如驢、牡有枝、角夏月則解生茸、茸落生角、其角及茸潛藏不見、山人能察而收之、牡者黃質白斑、胸腹微白、尾端亦白、背上一道黑毛、牝者無角、無斑而小也、鹿性多淫、一牡交數牝、而牡夜常喚牝而鳴、入秋最頻、故歌人以荻薄紅葉爲伍、以作閑寂之嘆也、六月而生子、鹿子無角、遍身有白圓斑、俗稱鹿子斑、在原業平詠、士峯之雪是也、鹿每食生草、就中喜穀、蔬穿田圃爲荒場、於是獵夫作笛聲、而聚牡鹿、其笛以鹿角根及胎鹿皮而造、或以蝦蟇皮爲勝、然吹之、動蛇虻多聚、故近世用胎鹿皮而代之、其聲作牝鹿之微音、而牡鹿慕來、竟躍踰墜陷、復不免弓炮之難、或曰、牝鹿至誤爲牡鹿之聲、凡獵夫吹笛、自山上至山下、則鹿至、若吹曠野林間、則不至、吹笛之人少不動身、則忽至于眼前、若少動身、則去、其來時必匍匐而至、雖林中草間、絕無聲而至、人以